

教職実践演習における模擬授業プログラム —特別な支援を要する児童への対応を含めて—

○奥井智一郎(帝京平成大学)
山本佐江(帝京平成大学)

齊藤 勝(帝京平成大学)

キーワード: 模擬授業, 教職実践演習, 特別支援

問題と目的

「教育職員免許法施行規則の一部を改正する省令」により、2019年度入学生から教職課程において「特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する理解」に関する科目が新設・必修化された。今後、教職を希望する学生の「学びの軌跡の集大成」として位置付けられている教職実践演習において、当該科目の内容を扱う必要が生じるであろう。発表者らは特別な支援を要する児童への対応を含めた模擬授業プログラムを開発し、実践したので、その概要について報告したい。

方 法

A大学の教職実践演習にて、学習に困難を示す児童が在籍していることを想定した模擬授業プログラムを実施した。対象は、小学校教諭免許状の取得を希望する4年生65名であった(前・後半の2組に分かれて実施)。

結果と考察

模擬授業実施の流れ

【第8回】教員が準備した1単元10時間の指導計画を学生に提示し説明した(第3学年「わり算を考えよう(あまりのあるわり算)」)。模擬授業を行う箇所がグループ間で重複しないように調整させ(6~7名×5グループ)、次週までに各自で指導案を作成するよう指示した(指導案は、教員によって7割程度作成してあり、指導上の留意点等を学生が書き足すようになっていた)。

【第9・10回】各自が作成した指導案に基づいて、グループとしてどのように授業を行うのかについて協議する時間を設けた。また、各グループで学習に困難を示す3名の児童役を決めさせ、授業のシミュレーションを行うように促した。

【第11・12回】全員が教師役の準備を行わざるを得ない状況をつくるため、模擬授業実施直前にくじ引きにて授業者を決定し、15分間の模擬授業

を行わせ、意見交換の時間を設けた。

学習に困難を示す児童の設定

計算に困難さを示すB児、読字に困難さを示すC児、行動のコントロールに困難さを示すD児の状態像を第8回で説明した(教員作成の指導案においても「児童観」としてクラスの状況と共に状態像を記載)。その際、ユニバーサルデザインの視点をもった上で個別対応の方法を考えるよう指示した。

Table 1 A大学「教職実践演習」の内容

授業内容	
第1回	オリエンテーション
第2回	自己の課題の明確化
第3回	週案簿について
第4回	週案簿の作成
第5回	現役教員との対話①
第6回	現役教員との対話②
第7回	ICTの活用・机間指導について
第8回	模擬授業準備①
第9回	模擬授業準備②
第10回	模擬授業準備③
第11回	模擬授業①
第12回	模擬授業②
第13回	事例検討
第14回	ロールプレイ
第15回	まとめ

注) 第15回を除いては2コマ連続で実施

模擬授業終了後、観察した担当教員らによる検討を行った。その際、本プログラムは、特別な支援を必要とする児童への理解及び対応方法を考え実施する力を確認できるものであるとの意見の一致をみた。今後、プログラムの修正・改善と共に、学生による感想や客観的指標等を用いて、その効果について検証を行っていく予定である。